

学位論文要旨

音楽学習における
多元的な知識の動態に関する研究

森 薫

博士論文の要旨

森 薫(東京未来大学こども心理学部 講師)

I. 論文題目

音楽学習における多角的な知識の動態に関する研究

II. 課題設定と目的

音楽を聴く・演奏するといった行動をしているとき、子どもたちはどのような知識をはたらかせているのだろうか。音楽に関する知識はどのようにもちいられ、またどのようにしてあらたに習得されているのだろうか。

音楽科教育の分野における知識は、「子どもが音楽から感受する客観的な対象」であり、「どの子どもにとっても認識可能で客観的なものでなければならない」(高須 2007)とされている。知識として措定されるのは、音楽を特徴づけている要素、楽曲の構成原理などである。客観的でスタティックなものが知識として認められ、それを習得するための指導法や授業構成法が検討される。こうした見かたは、二元論的知識観といわれる。

しかし、我々の音楽実践ではたらいっているのが二元論的な知識だけでないことは明白である。我々は音楽を聴くとき、無意識のうちに長調・短調の別を聴き分けて直観的に何らかの印象を抱くなどしているが、ここではたらいっているのは、その大半が非言語的な知識であろう。言語で明示的に表せるが、一般化されない知識もある。たとえばある合唱団がコンサートに向けて、どのような曲順でプログラムを組むかを検討する場合、つくられるプログラム案という知識は、1回のコンサートでの音楽表現においてのみ適切性をもつユニークなものである。このように考えていくと、二元論的知識観では、我々の音楽実践において生きてはたらく多様な知識のうちの一部しかとらえられないのではないか。ここに本研究の問題意識がある。

もうひとつ、本研究が問題意識を向けるのは、子どもたちが音楽学習においてもちいている知識には、教育内容としてのそれらとは別に、子どもたちが子どもたちのやりかたでもちいている知識が多様にあるのではないかということである。冒頭で挙げた音楽を特徴づけている要素、楽曲の構成原理などだけでなく、授業という場において求められるふるまい、友人との関係性やそれに基づく相互作用といったさまざまなリソースがあるのではないかということである。

本研究の目的は、20世紀以降に提出された認識論やそれに基づく学習論、音楽学、音楽教育哲学の所論を参照しつつ、マイクロ・エスノグラフィの手法をもちいて子どもたちの音楽学習における多角的な知識の動態を明らかにし、音楽科教育の分野にあらたな知識観を提示することである。この目的は、4つの小目的を有している。

- i) そもそも知識とはいかなるものかについて、認識論の知見を踏まえた検討をおこない、音楽実践における知識をどのように措定すべきかについて明らかにすること
- ii) 人々が知識をもちいて展開していく過程であり、またあらたな知識を何らかのかたちで得ていく過程である学習という営みについて検討し、音楽学習研究をおこなううえで適切な学習観について考察すること

- iii) 音楽実践における知識にはどのようなタイプのものがあるのか、その諸相について、音楽教育哲学の先行研究をもとに検討・考察すること
- iv) 音楽学習において、参加する成員が既存の知識をどのようにもちているのか、他の成員とどのように相互作用しながらあらたな知識を生成したり、既存の知識を修正・更新したりしていくのかについて検討・考察し、音楽学習における多面的な知識の動態を明らかにすること

Ⅲ. 論文の構成

本論文の構造は以下に示す図のようになっている。

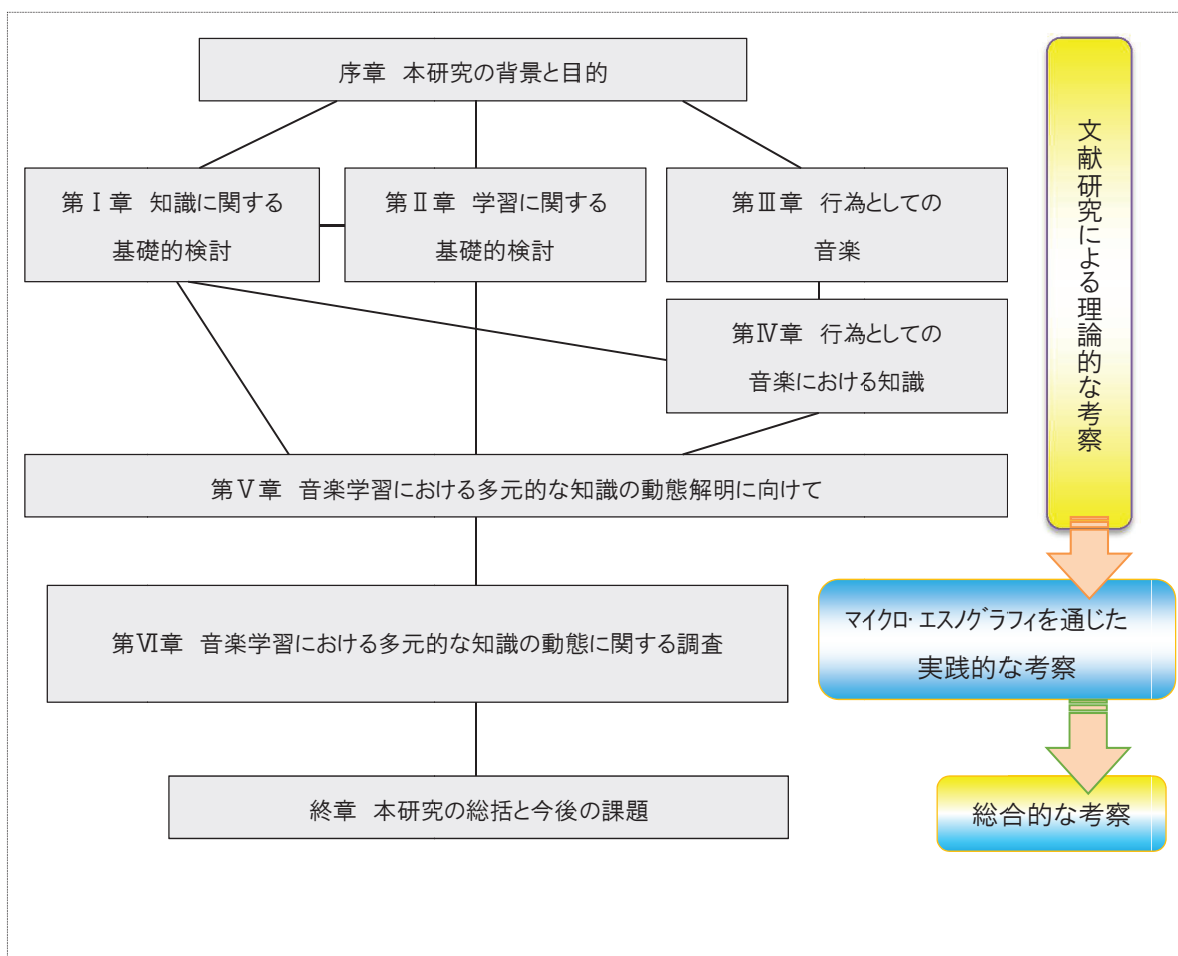


図 1 論文の構造と方法

Ⅳ. 各章の概要

序章 本研究の背景と目的

序章では、教育学において知識の問題がどのように論じられてきたのかを、イズラエル・シェフラー (Israel Scheffler 1978) やネル・ノディングス (Nel Noddings 1998) の研究をもとに整理し、教育の視点から知識の問題を検討する必要性を述べた。また、日本の音楽教育学の先行研究にみられる知識に関する問題について考察した。

さらに、アメリカの音楽教育哲学分野において 1990 年代に生じた、「MEAE (Music Education as

Aesthetic Education) 派對プラクシス(praxis)派」の論争を取り上げ、音楽における知識の問題が両者によってどのように主張されたのかを検討した。前者においては音楽的概念(musical concept)が最重要の知識として措定された(Reimer 1970)。後者においては、多元的な知識のモデルが示されていた。

序章の最後に日本における教育内容論争についても検討した。千成俊夫らの研究グループが音楽科における教育内容を論じるなかで、徐々に倫理的・美的規範としての知識やメタ知識をその範疇に入れようとしていたことを指摘した。さらに 2000 年代に入ると、日本の音楽教育に社会構成主義的な学習観が適用され、学習者自身が生成する知識への積極的な着目がなされるようになってきたことも概観した。

以上を経て、序章の最後に論文の構成や研究の方法を示している。

第 I 章 知識に関する基礎的検討

第 I 章ではまず、二元論的知識観がどのようにして成立したのか、そこにいかなる問題があるのかについて整理した。大きな 2 つの問題として、知識の「個人主義」「客観主義」があることを指摘した。

その上で、19 世紀末以降に示された認識論のなかからプラグマティズムを取り上げ、そこで提示された「可謬主義的知識観(fallibilism)」について検討、有用性について述べた。

さらにこの章では、プラグマティストであるジョン・デューイの知識観について詳細に取り上げて検討していった。デューイは「保証づきの言明可能性(warranted assertibility)」という独特の知識の定義を案出したが、この定義による彼の知識論には、「知識を支える習慣と探究のサイクル」「動態としての知識」「探究における言語の重要性」という特徴が含まれていることを指摘した。デューイは、あらたな知識を生成するまでの一連のプロセスを「探究(inquiry)」、探究をうみだす源泉を「習慣(habit)」としてそれぞれ位置づけたが、それについても彼の論考を検討・整理した。最後にデューイのこうした知識観が、音楽実践に適合するものであることを論証、音楽学習研究にどのような示唆を与えるのかについても考察した。

第 II 章 学習に関する基礎的検討

第 II 章では、まず学習論の系譜を概観した。そのうえで、音楽学習研究に適合した学習観は、社会構成主義的学習観であることを導出した。

つづいて、社会構成主義的学習観の源流の 1 つであるデューイの学習論を取り上げた。探究の理論を軸に、行為、美的経験といったキーワードから紐解き、デューイの学習論を援用した音楽教育分野の先行研究についても検討した。先行研究においては、6 フェーズから構成される探究の理論を雑駁に援用しているものが目立ち、また、デューイが重要性を強調していた習慣のはたらきへの視点が欠けていることが明らかとなった。

デューイの学習論をふまえて子どもたちの音楽学習をとらえるにあたっては、旧来型の教授—学習モデルではなく、学習者の視点からそのプロセスを詳らかにしていく必要がある。そこで第 II 章の最後に、状況的学習論の検討をおこなった。

状況的学習論における学習とは、実践のコミュニティへの参加とその深まりとして定義される。本論ではそうした学習を構成する要因である、「実践」「実践のコミュニティ」「参加とアクセス」についてどのように捉えるべきかを整理した。さらに、状況的学習論を援用した音楽学習の先行研究を検討し、そこにある問題点を明らかにした。問題点としては、「会話の切片化による文脈と複雑性の捨象」、「指導者

の発話への偏重」、「行為の捨象」、「一般的な授業からの乖離」の4点が抽出された。

第Ⅲ章 行為としての音楽

この章では音楽を行為としてとらえる立場をとった先行研究を検討している。まず、ブラックング(John Blacking)の論を検討した。またスモール(Christopher Small)の「ミュージッキング(musicking)」論を検討し、音楽教育学に関する言及を抽出、音楽学習研究への示唆を考察した。スモールによる「身ぶりの言語」についての論には、彼のミュージッキング論全体の趣旨と相反する本質主義的な記述が含まれており、批判の余地が見出された。さらにエリオット(David J. Elliott)が展開した「ミュージッキング(musicing)」論を検討した。

章の最後に、スモールとエリオットの論を比較し、共通点と相違点について整理した。2者の論はこれまで、日本の先行研究においては同一視される傾向にあった。そこで本論文では詳細に彼らの論を比較・検討している。

両者の共通点として「音楽を行為であるとした点」「演奏や聴取だけでなく、パフォーマンスに関わる全ての行為を音楽とした点」「音楽に関わる身体のはたらきに重要性を見出した点」「音楽の行為や活動が展開される社会、文化的なコンテクストを重要視した点」「西洋音楽等、特定の音楽文化における価値体系を絶対的なものとししない点」が挙げられる。一方で相違点としては、「身体的位置づけと強調点」「社会・文化的コンテクストにおける強調点」が抽出された。なお本研究では、相違点のうち、前者についてはエリオットに、後者においてはスモールに論の優位性があることを指摘した。

第Ⅳ章 行為としての音楽における知識

この章では、エリオットの musicing 論において展開された「音楽の知識(musical knowledge)」「音楽の思考・知(musical thinking and knowing)」に関する論を詳細に検討した。

エリオットは1995年に『音楽の問題(原題：“*Music Matters*”、邦訳未公刊)』初版を発表したが、ここで先述の MEAE 批判をおこない、4タイプの多元的な知識が関わる手続き的な過程として音楽実践を論じた。4つのタイプの音楽の知識について、性質や特徴を整理した。

また、エリオットは初版発表から20年を経て、2015年に、大幅改訂した『音楽の問題 第2版(原題：“*Music Matters 2nd edition*”)」を発表している。ここでは音楽の知識に関する論も大きく変化し、音楽の知識ではなく、音楽の思考・知(musical thinking and knowing)の概念がもちいられ、タイプも8つのものが示されている。本章では各類型の性質と特徴について検討をおこなった他、初版から第2版にかけての改訂のポイントについても整理している。

章の最後に、エリオットによる音楽の知識論の功績と課題について検討した。課題として、それぞれのタイプの知識の相互連関、成員同士の相互作用とそこでの知識発現のフェーズ、言語的な知識や思考・知の様相、コンテクストと身体的位置づけのしかたについては、検討不足もしくは検討がなされていないという点が抽出された。

第Ⅴ章 音楽学習における多元的な知識の動態解明に向けて

この章では、第Ⅰ章から第Ⅳ章をふまえて、本研究において音楽、学習、そして知識をどのように捉えるのかについて、あらためて整理した。また、子どもたちの音楽学習における多元的な知識の動態を

明らかにするにあたって、先行研究から援用する知識の類型を、以下の6タイプとすることを示した。

- ・ 言語的な音楽の知識 (verbal musical knowledge)
- ・ 経験的な音楽の知識 (experiential musical knowledge)
- ・ 直観的な音楽の知識 (intuitional musical knowledge)
- ・ 価値発見的な知識 (appreciative knowledge)
- ・ 倫理的な音楽の知識 (ethical musical knowledge)
- ・ メタ認知的な音楽の知識 (metacognitive musical knowledge)

第VI章のマイクロ・エスノグラフィを通じて措定の必要性が見出されたあらたな類型である「行動的な音楽の知識 (behavioral musical knowledge)」についてもここで提示している。

第VI章 音楽学習における多元的な知識の動態に関する調査

この章は、1年にわたり実施した小学校3年生の音楽科授業に対する観察を中心とした、マイクロ・エスノグラフィである。はじめにその方法と、メタ理論である解釈的アプローチについて、発達心理学の分野における先行研究を参照しつつ概観した。そのうえで、本研究の調査では、「知識の主体としての子ども」「子どもたちの相互作用」「授業への参加としての学習」の3つの視点に立つことを述べた。

つづいて、調査の概要や経過を述べたうえで、「習慣的な発話・行為」「発話を中心とした相互作用」「行為を中心とした相互作用」「探究」の4つの切り口から、子どもたちの音楽学習における多元的な知識の動態について検討した。観察データをもとに解釈的な分析をおこなっている。

調査を通じて、多元的な7タイプの音楽の知識について、以下のことが明らかにされた。

◆経験的な音楽の知識

他の類型の音楽の知識の源泉、データベースとしての機能をもっている。子どもたちの習慣的な行為や習慣的な発話もこの知識の暗黙裡の使用によってなされていると考えられた。

子どもたちは自らが積み重ねた音楽の実践経験をもとに、この知識を構築してきている。それは彼らにとってデータベース、準拠枠としてのはたらきをもっている。その範疇から外れた音の響き等に出会った場合に、違和感や驚きとして直観的な音楽の知識がはたらき、時にそれが言語化され、相互作用のフェーズが始まっていく。

◆言語的な音楽の知識

子どもたちの発話はすべて、言語的な音楽の知識の発現である。発話することによって、1人の子どもの音楽の知識—例えば楽曲に対する直観や解釈等—は、他者と共有される。言語的な音楽の知識は、音楽実践における相互作用のハブといえる。ただし、子どもたちの発話を具にみてもと、コンテキストによって発話のスタイルと内容に違いが生じていることが明らかとなった。

i) 子どもの自発的な発話において

この場合、オノマトペや感情語、比喩等の言語的な音楽の知識がもちいられていた。子どもたちは違和感や驚きを発話することで、自分たちの楽曲に対する興味・関心を焦点化し、何が自分たちにとっての問題であるかを明確にし、共有していく。

ii) 教諭のはたらきかけが契機となっている発話において

この場合、子どもたちはフォーマルなスタイルの発話をおこない、その内容は音楽的概念に言及する比較的分析的なものが多かった。ただし音楽的概念の名辞はもちいられず、述語や修飾語のかたちで言

及されていた。

iii)探究における音楽的概念の使用

探究のプロセスが展開する場合には、子どもたちの発話に音楽的概念の名辞がともなっていた。子どもたちは、楽曲に対する違和感の要因を模索し、推理する中で、意味がわからないままに音楽的概念の名辞を発話し、それを共有し、行動を通じた検証をおこなう。それを通じて、彼らにとってのあたらしい「保証づきの言明」すなわち知識を共同的に創出していた。

◆行動的な音楽の知識

音楽実践をその共同体に集う成員の相互作用であるととらえると、潜在的にある経験的な音楽の知識が可視化されずに主体のうちで働いている場合と、行為として発現し可視化されたときとでは、道具的機能の質が変容している点で相異があることになる。そこで他者や自身から見て可視的に行動としてあらわれる知識を、本研究で「行動的な音楽の知識」としてあらたに措定した。これは言語的な音楽の知識とならび、相互作用のハブとなる知識である。

個人のなかで潜在的に機能している経験的な音楽の知識が、行為として発現し他者や自身から可視化されることで、相互作用のハブとしての機能をもつようになっていた。また、行動的な音楽の知識は、他者に使用されるだけでなく、知識の主体自身にも道具的に使用されうることが見出された。

◆直観的な音楽の知識

子どもたちは経験的な音楽の知識を基底的に使用しながら実践に参加しており、ここではデューイのいう「習慣の原理」が機能しているといえる。しかしそうしたなかで、なんらかの違和感や驚きをおぼえる場合がある。その違和感や驚きが、直観的な音楽の知識である。違和感には、新奇性のある響き、予期していた展開と違っていたという驚き等、さまざまなものが含まれる。デューイが探究の理論で述べた「抵抗」はこれにあたる。直観的な音楽の知識は、時に言語的な音楽の知識として発現する。

直観的な音楽の知識が顕在化すると、習慣のはたらきが寸断され、探究の第1フェーズ「不確定な状況」が立ちあがる。この知識は、相互作用や探究の契機として重要な機能をもつ。

◆倫理的な音楽の知識

エリオットは倫理的な音楽の知識を、善いこと(the good)のために自らの音楽的な能力をもちいようとする傾向と関わっており、とりわけ教育の文脈ではそれが問題となることを彼は指摘している。

ある行為に際して何が善いことなのか、どうすべきなのかということは、楽曲そのもののコンテクストから判断されるだけではない。小学校音楽科授業の観察からは、授業という実践のコミュニティを取り巻くコンテクストから倫理的な音楽の知識が醸成されていることがうかがえた。授業のある場面で、どのような内容の発話や行為をどのようなスタイルで行うことが望ましいかということが、学習活動を取り巻くコンテクストによって規定されるということである。

◆価値発見的な知識

エリオットは価値発見的な思考・知について、ある実践下で、そこにある課題を障害としてではなく可能性として見なすことにより、それを克服する力(ability)のことであると説明した。オリジナルな視点をもって、リスクを厭わずに実践のあらたな方向性を探っていく、場合によってはあらたな価値や意味の創造をしていくという知識である。

価値発見的な知識によって、子どもたちの探究が推進していくと示唆された。特に「推理」以降のフェーズでの子どもたちの発話と行為には、価値発見的な音楽の知識がはたらいていたと考えられる。こ

の知識がはたらくことによって、子どもたちは単なる相互作用から一步踏み出し、不確定な状況から収集された事実を組み合わせて仮説を形成したり、仮説を行動を通して検証したりするフェーズへ進みだす。そして、自分達なりのあたらしい知識を生成していくことができる。

◆メタ認知的な音楽の知識

この知識は、音楽実践の中で行為しながら自らのそれをモニターし、周囲の状況とすりあわせながらメタ認知的にはたらく。観察を通じ、このタイプの知識は、他の子どもの行為を参照し、そこにある自分とのズレを見出す、つまり直観的な音楽の知識の作動を契機としてはたらいっていることが明らかとなった。他者に分かりやすいように自らの行為をモニターし、動作を調整するというかたちで、この知識が使用されていた。子どもたちは、他者の行為をリソースとして自分の行為を省み、修正し、他者へとはたらきかけていくのであった。

終章 本研究の総括と今後の課題

本研究の成果は以下である。まずデューイの知識論や学習論を詳細に検討し、それと音楽における知識の適合性について検討・考察した。またデューイの学習論や状況的学習論を援用した音楽教育学分野の先行研究における課題を克服し、マイクロ・エスノグラフィの手法による調査をおこなった。さらに、これまでとくに日本国内では同一視されることの多かったスモールとエリオットのミュージッキング論の異同を明らかにした。

もっとも大きな成果は、音楽学習における多元的な知識の動態の一端を明らかにできたことである。実際の音楽学習の現場において、子どもたちが多元的な知識をどのようにもちい、相互作用をし、あらたな知識をつくりだしているのか、異なるタイプの知識がどのように関連しているのかについて描きだすことができた。

今後の課題としては、技能の向上の過程を明らかにすること、子どもたちの発話や行為にあらわれる、替えうたをはじめとするユーモアの意味と機能を検討すること、音楽の知識の使用や創出が、学習者の発達段階によってどのように異なるのかを明らかにすることが挙げられる。